付録1

設定のエクササイズ

次のエクササイズを通して描写の筋力トレーニングをしよう。まず場所をひとつ選択し、五感にまつわる感覚的なディテールをそれぞれ2つずつ挙げてみよう。

視覚

1：　　2：

嗅覚

1：　　2：

聴覚

1：　　2：

触覚

1：　　2：

味覚

1：　　2：

次に、この場所を一度も訪れたことがない登場人物の視点を通じて、設定を描写する文章を一段落分書いてみよう。光の加減や、時間帯、あるいは季節の描写などを盛り込み、五感から少なくとも3つの感覚は用いること。登場人物がどういう人物で、その人が何を感じているのかを読者に示してみよう。

次に、その文章を次のように書き直してみることにしよう。先に書いた文章に「何か悪いことが起こるかもしれない……」とほのめかすような伏線を加えてみるのだ。読者の注意を引くために、どことなく不安げな雰囲気を作り上げ、設定の中で不似合いなディテールに焦点を合わせることに集中してみよう。新たな感覚的描写を組み込んでみるのもひとつの手だ。

最後にこの文章を書き直して緊張感を高めてみることにしよう。登場人物が何かから逃げたり、あるいは何かと戦ったり、何かから隠れたりする際に、その人物が設定とどのように関係しているかについて描写してみてほしい。人物の感情や雰囲気を提示しながら、その場面で展開している事柄を描くことが必要だ。切迫感を出すためには、一文の長さをなるべく短くすることも忘れないようにしてほしい。

*P572～P578の付録はすべて、英語版はWriters Helping Writers（http://writershelpingwriters.net/writing-tools/）にて、日本語版はフィルムアート社ウェブサイト内『場面設定類語辞典』書誌情報（http://filmart.co.jp/books/playbook_tech/setting_thesaurus/）にて、PDFが入手可能。

付録 2

設定のプランニングツール

設定描写は多面的なものであるがゆえに、読者をただたんに場面につなぎ止めること以上の役割を担わなければならない。執筆に先立って、「五感」、「光のありかた」、「天候・季節に伴う要素」、「必要な雰囲気」、「必要な象徴」などについて綿密にプランを立てることによって、登場人物の過去の出来事、下さなければならない選択、昔から抱いている恐怖や未来への希望を呼び込むことが可能になる。

場所と場面	見えるもの	聴こえるもの	匂い	味	質感	天候	光の加減・時間帯	雰囲気・感情	象徴

付録3

感情的価値の設定ツール

説得力のある設定は、主人公をはじめ、もしかするとほかの登場人物にとっても特別な意味を持つことになる。こうした感情的価値というのは、作家が性格づけしたり雰囲気作りを通して設定に組み込んでいくものである。感情をかき立てる場面を作るために、下記の枠を埋めてみよう。

例

場所

メアリーが子どもの頃育った家の台所。実家には、もう何年も帰っていない

引き金となるシンボル

壁に掛けられた十字架
子ども時代と同じランチョンマット
何時間もずっと座らされ続けた木の椅子

この設定は、過去のどんな出来事を、あるいは現在のどんな問題を象徴しているのだろうか？　それに関連した感情を生じさせるディテールを仕掛けよう。

出来事

沈黙の中で夕食を摂りながら、子どもの頃、食事中に口を開く度に罰を受け、水を求めることさえ認められなかった記憶が甦る

心の中の葛藤

身体的な虐待を受けていた事実を父親に突きつけたいが、彼が狂信的なほどに信心深いことの重みや、自分の低い自尊心にそれを押さえつけられてしまう

登場人物は、心の中でどんなもがきに直面しているのだろう？　それを示すには、この場面におけるどんな出来事や自然な行動が役立つのだろうか？

登場人物の感情

メアリーの感情は、罪悪感、怒り、弱さ、憎しみ、恥が入り交じっている

引き金となる人々

メアリーの父親（彼女の怒りの焦点）は、彼女が子どもの頃に苦しみ、今日にいたるまで影響を及ぼしている虐待を象徴する人物である

登場人物の中に生じた、まだ解決に至っていない感情とは何か？　またその感情の引き金となるのは（周囲に誰かが存在する場合）登場人物の周辺にいるどういった「タイプ」の人々だろうか？

引き金となる天気や環境

辱められているような気持ち（自分は罪深く価値がない存在だというような気持ち）にさせる、彼女を照らす台所の明るい照明

結果

口を開いてはいけないというプレッシャーを感じていた沈黙を破り、メアリーは自分が受けた虐待や、神の名を利用して自分がされたひどい行為について、父親に突きつける。

雰囲気をもたらしてくれるのは、どんな天気や環境の要素だろうか？　設定は登場人物をどのように揺さぶり、最終的にどんな決断が下されるのだろうか？

登場人物をとある決断、選択、行動へと向かわせるために、気持ちを増幅させたり、過去を思い出させたり、これから先の選択肢を提示したりできるような感情的な引き金（人々、シンボルとして役割を果たす設定の細部等々）を場面に散りばめてみるのだ。

場所

引き金となるシンボル

この設定は、過去のどんな出来事を、あるいは現在のどんな問題を象徴しているのだろうか？　それに関連した感情を生じさせるディテールを仕掛けよう。

出来事

心の中の葛藤

登場人物は、心の中でどんなもがきに直面しているのだろう？　それを示すには、この場面におけるどんな出来事や自然な行動が役立つのだろうか？

登場人物の感情

引き金となる人々

登場人物の中に生じた、まだ解決に至っていない感情とは何か？　またその感情の引き金となるのは（周囲に誰かが存在する場合）登場人物の周辺にいるどういった「タイプ」の人々だろうか？

引き金となる天気や環境

結果

雰囲気をもたらしてくれるのは、どんな天気や環境の要素だろうか？　設定は登場人物をどのように揺さぶり、最終的にどんな決断が下されるのだろうか？

付録 4

設定チェックリスト

場所：

場面や章：

これから展開する事柄にとって、なぜこの設定がもっともふさわしいのだろう？：

この設定描写を通じて自分が達成したいこと：（当てはまるものすべてを選ぼう）

- □ 登場人物の葛藤や緊張感を作り上げる
- □ これから起こる出来事の伏線を張る
- □ 感情に駆り立てられた行動や選択を生じさせる
- □ 登場人物に過去の（良い・悪い）出来事を思い出させる
- □ 古い心の傷を突く
- □ 自身が抱えている恐怖に主人公を立ち向かわせる
- □ 主人公がその試練を上手く乗り切って過去の痛みを手放すことができるように、かつて心の傷を負った出来事を再現する
- □ 重要な背景を積極的に伝える
- □ ひとり以上の登場人物について特徴づけをする
- □ より深いメッセージや意味を強調するための象徴やモチーフを提示する
- □ 特定の雰囲気を伝える
- □ 話の筋を誘導する
- □ 障害や挫折を通して試す
- □ 設定に感情的価値を与え、感情的な引き金を敷く

過去の出来事を象徴する、感情を高める、メッセージを強調するための設定のディテール：

視点となる登場人物がこの設定と関わる方法：

おわりに

「郊外編」「都市編」ともに、一般的な架空の設定におけるもっとも説得力ある表現を収録しようと努めたが、本書は決して完全版ではない。考えられる場面設定というのはもちろんほかにもあるし、本書に収録したものときわめて似通った設定というのも存在するはずだ。収録にあたっての選択基準は、そうした数限りなく存在するいくつもの場面設定から、その描写のためのスタート地点となるようなものであるという点だ。もし自分が探しているものとぴったり一致する設定が見つからないときには、それに似た部分を有している項目をあたってみると、必要としている描写のディテールに出会えるかもしれない。

項目を見ていくなかでは、いくつか矛盾した表現にも出会うかもしれない。たとえば「マリーナ」の項目には「波」についての記述もあるが、同時に「静かな水面」についての記載もある。風の有無、水の活動量、付近の海洋生物、あるいはその他の要因次第で、それが「波」なのか「静かな水面」なのかは決まるわけだが、そのどちらにも当てはまる可能性だってある。設定はその状況によって日ごとに、時間ごとに異なる。だから本書ではさまざまな選択肢を提供するために、できるだけ多様な可能性を網羅するよう心がけた。

広範囲にわたるリサーチを行ったが、記載されているのはあくまで基礎的な役割を果たすだけのものに過ぎない。いかなる設定であっても、そこには無限に――しかしそれぞれに異なる――ルーツが共通する設定が存在する。アラスカの森には、南カリフォルニアのそれとは異なる動物や植物、あるいは木々が生息しているだろうし、ましてボルネオやニュージーランドといった他国であればそれは大きく異なるだろう。もし描こうとしている作品が実在する特定の場所を舞台としているなら、項目に挙げられている事柄と異なることは何かについて、じっくり調べてみてほしい。

項目に記載されたすべてのディテールが、その場所にとって普遍的なものであるとは限らない。設定を調整する際には、登場人物の行動様式、宗教的信念、性格、教育レベル、財政手段などがさまざまに影響する。たとえば「郊外」といっても、